【坂本則子さん　プロフィール】

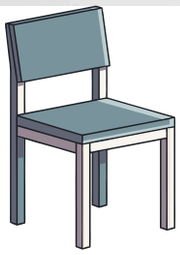
1956年生まれ。
中学校教員として、38年間思春期の子どもたちと向き合う。
二人のわが子の不登校をきっかけに、登校拒否･不登校と向き合いながら、
教育相談部長、特別支援学級担任を経験。
現在は、苦労を重ねた先に変化し成長していく子ども･親の姿に感動しながら、
登校拒否･不登校問題全国連絡会、登校拒否･不登校を考える京都連絡会
世話人として活動している。
2025年8月　書籍『「わが子が不登校」という問い―母として教師として』を出版

坂本則子さんからのメッセージ

　子どもが「学校に行きたくない」と言いだした時、親はとまどい、教師も悩みを抱えることになります。口で言えずお腹が痛くなり玄関で固まってしまう子。
初めは「様子を見よう」と構えてみても、何日も動かない子どもにしびれを切らし「勉強が遅れるのでは」と心配を募らせる親。「何かあったの?」と問い詰めても子どもは口を閉ざしがちです。
また、「待つ」ことが大事と言われても、「いつまで待てばいいの」と焦ってしまいます。そんな時、ひとりで待つのではなく、親の会などでつながり合って、共に待つことができれば、ゆとりを持って子どもを受け止められるようになるのではないでしょうか。

2025年10月　文科省は「不登校児童生徒過去最多、353,970人（令和６年度）」と報じました。今 子どもたちにとって学校はどのような場所になっているのでしょう。
子どもたちが不登校という形で悲鳴を上げ、大人たちに問いかけているものは何なのか。
教育相談部として取り組んできたことや、学校では何ができるのかをお伝えしたいと思います。

たっぷり休んで自己肯定感がふくらんだなら、子どもはいつの日か動き始めます。
自立へのあゆみは遅々として目に見えないことが多いのですが、時に鮮やかでドラマティックな姿を見せてくれることもあります。
不登校から自らの力で立ち上がっていく 親･教師･子どもの姿に、生きづらい時代を生きるヒントと希望があると感じています。



どなたでもご参加ください
申込みは要りません